

月の影影の海 上巻・下巻



小野不由美／著 新潮社
平凡な女子高生、中嶋陽子はある日突然化け物に襲われる。謎の人物「ケイキ」に見知らぬ世界へ連れ去られ一人になった陽子を待つのは、飢えや裏切りなど苦難が続く旅だった…。以前にアニメ化もされた「十二国記」シリーズの一作です。上巻は辛い展開が続きますが、真実が明らかになる下巻までぜひ読み進めてみてください。
石渡康子 都筑図書館職員



日本昔話百選 改訂新版



稲田浩二・稲田和子／編著 三省堂
本書は長い歳月をかけて全国の村々にわけ入り各地の語り部から聞き取った百編からなる昔話集です。北海道から鹿児島までを三部に分けて昔話が配列されています。また改訂新版には地域語の右に共通語が添えてあり読み易くなっています。故郷のお話を探すのも善し、家にいながらに日本中の昔話の旅をお楽しみ下さい。
伊藤千秋 つづきっこ読書応援団



ふしぎな木の実の料理法



岡田淳／著 理論社
ふしぎな木の実の料理法を調べるため、主人公のスキッパーはこそあどの森のバラエティ豊かな住人と交流し、まともなものから変なものまでいろいろな料理法を試していきます。こそあどの森で、スキッパーと一緒に住人の素敵な家を覗いてみませんか。「こそあどの森」は長く続いているシリーズで、5月には最新刊も出ます。
茂木周子 都筑図書館職員

客観性の落とし穴



村上靖彦／著 筑摩書房
「客観性」「数値的なエビデンス」に過大な価値を見出した結果、現代の社会は比較と競争が激しくなったのだと著者はいいます。そして、私たち自身を苦しめ、社会の弱い立場の人々に厳しく当たることにつながっています。一人ひとりの経験や声を大切に、競争とは別の方向性から社会をつくる可能性を考える一冊です。
日下部倫子 都筑図書館職員



ギルガメシュ王のものがたり

伊賀三江／文 浅野由美子／木版画 森の文化フォーラム
野鳥愛好家で、ヒトと自然がともに暮らす里山の保全活動に参加しています。ギルガメシュ王のヨクで、森林を破壊してしまうお話しで、名もない人々によって長年語り継がれてきました。森林はヒトなしで生きてゆけますが、ヒトは森林なしでは生きてゆけません。地球沸騰化時代、くさび型文字文学の最高傑作おすすめです。
やまだみき つづきっこ読書応援団

ちいさなメリーゴーランド



マーシャ・ブラウン／作 こみやゆう／訳 瑞雲舎
主人公の男の子アンソニーが、大きい子の野球の仲間に入れて、家で風の破れを修理していると、馬に引かれたメリーゴーランドがやってきました。子どもの心を察して、幸せにする大人の姿がほほえましく、読んでいて幸せな気持ちになる絵本です。
吉野智子 つづきっこ読書応援団



ブルクミュラー 25の不思議 なぜこんなにも愛されるのか

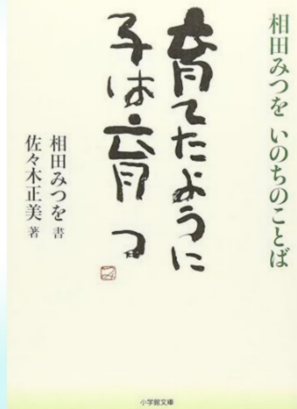


飯田有抄・前島美保／著 音楽之友社
昨年、ピアノのお稽古を久しぶりに再開しました。子供の頃使っていたテキストを40年ぶりに引っ張り出して弾いていたら、この本に出会いました。かつてレッスンの苦楽を共にした曲の事が色々な視点から書かれていて、日本中の子どもたちに長く愛され続けている曲集だと改めて思いました。これからも大切に読みたいと思います。
村岡昌代 つづきっこ読書応援団

育てたように子は育つ



相田みつを／書 佐々木正美／著 小学館
相田先生のいのちの詩を児童精神科医の佐々木先生が愛深いメッセージで解説。18年前、初めての子育てで凝り固まった私の頭と心を紐解き、子が、親が、を超え、その人を”信じる”とは…と、自分自身に向き合い気づかされる子育て本。今でも、成人した子への向き合い方にハッとさせられている私のバイブルです。
中山裕子 つづきっこ読書応援団



おまえうまそうだな



宮西達也／作絵 ポプラ社
孤独な肉食恐竜ティラノサウルスが、草食恐竜アンキロサウルスの無垢なあかちゃんとの出会い、一緒に過ごすうちに、父性に目覚めます。ラストは、切ない別れとなりますが、ティラノサウルスの相手を思いやる心と行動に、思わず涙し、あたたかい気持ちにさせてもらった絵本です。
浦田和代 つづきっこ読書応援団

アフリカの音



沢田としき／著 講談社
大地のめぐみ、いのちのつらなりへの感謝を表現している絵本です。西アフリカの太鼓、ダンスの文化、生活様式を通して、西アフリカの人々の命の喜びを感じることができます。鮮やかな絵と心地よい文で、表現豊かに伝えている楽しい一冊です。
石井智美 つづきっこ読書応援団



おつきさまこんばんは



林明子／著 福音館書店
屋根の上の猫ちゃんは、雲さんに「どいて どいて」と頼んだのだよ。さて、さて猫ちゃんのねがいはかなうかなあ……。お月さまの絵本は、月のペープサートをつかって、歌いながら読み聞かせをしています。満月を見上げていると、いつも故郷の坊津の海を渡ってくる月を思い出して、思わず沢山の願い事をします。
鮫島和子 つづきっこ読書応援団



ペスト



アルベール・カミュ／著 中条省平／訳 光文社
約70年前に出版のこの本をコロナ体験後の今読む。小説とは思えないリアルさ。ネズミの死、些細なことが瞬く間に全世界を覆う暗雲となる。死者の埋葬も間に合わぬ事態。不安にひとはおののく。主人公の感慨「恐怖と孤独感に右往左往しないためには、自分にできることを誠実にやることだ。日々の仕事の中にこそ確かなものがある」忘れないようにしましょう。世界的感染症はくり返す。
野島弥生 つづきっこ読書応援団



水車小屋のネネ



津村記久子／著 毎日新聞出版
人と人とのつながりや助け合い、お互いを思いやることの尊さを感じる小説。自分というものが他者でできているという言葉が自然と胸に染み込んだ。本当にそうだよなと共感し、これまで出会った人たちのことを思い浮かべながら読んだ。前向きになりたいときに勇気をくれる作品。
友安凡子 つづきっこ読書応援団

